
フィクション作品はいかに現実について主張するのか

徐逸傑(東京大学)

本発表は、フィクション作品の制作および提示を通じて、現実についての主張を行う現象を、言語行為論の観点から解明することを目的とする。

一般に、フィクション作品は現実に関する主張を行っていないと見なされる。虚構的な人物や出来事が、我々の住む現実世界に実在すると考える者はいないし、登場人物の発話が現実において真であっても、それは偶然的に真であるにすぎないと考えられる。このような特徴に基づき、分析美学の議論においては、Searle(1975)や Beardsley(1981)などが、虚構的発話を「主張の偽装」あるいは「発話内行為の再現」として位置づけてきた。

しかしながら、これだけで説明しきれない事例も存在する。例えば、フィクション作品の内容を理由に作者や提示者が批判を受けたり、場合によっては法的責任を問われたりすることがある。仮にフィクション作品が現実についての主張を全く含まないとするなら、もしそれらの批判が正当であるとすれば、こうした事態は生じ得ないはずである。すなわち、フィクション作品が一定の条件下で現実に関する主張を行うと見なされる場合があると考えられる。

この点に関する近年の先行研究として、García-Carpintero (2019) は、フィクション作品が間接的主張を通じて読者に知識を伝達し得ることを論じている。また、Dixon (2019, 2020) は、芸術作品による嘘やヘイトスピーチの問題を取り上げ、作品がまじめな言語行為を遂行するモデルを提示している。しかし、García-Carpintero の議論は作品の構成文が主張の間接言語行為を行う場合に限定され、Dixon の議論はむしろ作品による言語行為の倫理的帰結に焦点を当てているため、フィクション作品による主張のメカニズム自体の分析は十分とは言えない。

本発表では、フィクション作品が現実について主張を行っているように見える事例を取り上げ、Paul Grice の協調原理および John Searle の言語行為論を参照しつつ、それらの事例が主張として成立するための諸条件を分析・検証する。

本発表の主張は以下の通りである。ある発話が「断言型 (Assertives)」の言語行為として成立するには、発話者の信念条件を満たすだけでなく、文脈における「断言可能性 (Assertability)」の条件も満たさなければならない。言い換えれば、フィクション作品が主張を行うためには、特定の文脈の中で Grice の「質の格率」および「関係の格率」に照らして当該主張が推論可能でなければならない。

さらに、この断言可能性を規定する要因としては、フィクション作品のジャンルと慣習、作者あるいは提示者と受け手の信念状態、そしてそれらの信念を正当化する文脈的要因が挙げられる。以上を通じて、フィクション作品がいかにして現実について主張を遂行し得るのか、その理論的枠組みを提示したい。